

に向かつて行進を続けた。

久留米を出発した時の軍靴の音と武装解除地に向かう軍靴の音とは、まるで違う音に聞こえたのが頭に焼き付いています。

## ダモイ青春

滋賀県 国松 清

多くの同窓の陸海軍へ進んだ何人かの者より「日夜猛訓練に励みおる」との便りを受け、意を決し、特別幹部候補生に志願した。念願かない、いよいよ皇国防人の一人として、昭和十九年四月一日、兵庫県加古郡加古川町の神野教育隊航空通信隊に入隊。憧れの軍隊生活に入り、日夜軍務に専念、無事一期の検問終り上等兵に進級、一年後には兵長、転属の命により支那に満州に、お互いの健斗を誓いあって別れた。

昭和二十年に入り敵機の本土空襲激しく、同期生五人とともに航空校を出発する。もちろん国家の干城として

雄々しく散る葉本望なれば、遺書、遺髪、遺爪、遺品と身辺を整理をし懐しの父母のもとに送った。人生二十歳いずこの地にて散ろうと、これ男子の本懐である。途中岡山、広島空襲を目の前にし強く胸を打たれた。この仇は必ずとらねばとみなは頬を赤くしたりする。

博多出発、今まさに祖国を発たんとす。生を受け二十年優しく育んでくれた懐かしき麗しの祖国よ、人々よ、いずまでもこのままだと祈る。荒波狂う玄海灘、同行者一同船酔いに参りたり。

未知の大陸の入口釜山港に上陸。第一印象として暗い不衛生な港町。そして朝鮮半島縦貫鉄道の車中は、ただ郷愁の念と寂漠の感が交錯する。そして東洋第一の製鉄所、鞍山に到着、湯崗子の温泉に入浴し、到着の報告をしたところ、航空通信部隊の主力はすでに北滿へ転出、留守部隊として若干残留しているだけで、受け入れは出来ないことのこと。また車中の人となりチチハルへ向かう。

チチハルの飛行場の一角に駐屯している第十七航空情報隊、満州一六六九六部隊第三中隊（山本隊）に到着し

たのは七月三十日ごろであった。遠く祖国を離れ、父母の安否を思い、戦友のことを考えるとき、胸が一杯となる。いよいよ活躍の時が来たのだ。

しかし空襲熾烈の内地からまた我々にはなんとなく大陸的な陽気さを感じ、戦争下の実感無く、決戦気分が薄らいでいる印象が強く心に残る。在満の方々に、内地の光景を、一目見せてやりたいと思うほど、平和な満州をしみじみ感じた。そして、この平和な大地も、やがて砲煙弾雨に見舞われるかと思うと、人間社会が非情に思われてならない。

そうこうするうち、また新しい命令を受けた。即ち、敵機に対する目視による監視から電探による監視に切り替わるため、その専門技術修得のため、数ヶ月の教育予定で、南教育隊に派遣され、その研鑽に精進した。時あたかも八月九日、日ソ開戦となる。

教育終了のあかつきには、ソ満国境の第一戦に展開し、科学戦を挑むところだったが、惜しくも、教育半ばにして開戦となり、直ちに原隊復帰した。

そのころ我々先輩たちが盛んに活躍している戦斗の情

報が入ってきた。国境方面の我が軍は、激戦中とか。しかし一方、チチハル一帯の軍事施設は、日本軍の手によりどんどん爆破されていく、詳細はわれわれの知るところではない。在満邦人と、婦女子の引揚げ状況をみるにつけ、心が落ち着かない。

国境方面の部隊は、このチチハル一帯の線で食い止める作戦で、地上部隊はドンドン後退してくる。我々航空部隊は、ハルビンに下がって、警戒任務につくとのことだったが、実現せず、ついに終戦となった。小民屯駐屯地にて待機となる。

この間、満人、満軍の暴動、暴行が発生し、日ソ開戦と同じに満人たちの家屋の軒々にはたちまち赤旗がひるがえった。満人たちの過去の歴史からの処世感覚からだろうか。とにかく、変心の速さに驚くと同じに、憤りを覚えた。

遂に八月十五日正午、隊員一同整列、玉音放送を初めてきく。「忍び難きを忍び、耐え難きを耐え」のお言葉が印象にのこる。十五日正午に期し長い戦争は終わった。

無条件降伏との由、関東軍約五〇万ならびに、在満邦人

の心境は如何なりや。関東軍は、皇軍に非ず、関東軍のみにて戦う、とまでいって悔しがらる。

そして平和の鐘は十二時を期して鳴り響いたのだ。敗戦によって残したものはただ犠牲のみ、多くの尊い人命をどのくらい散らしたろうか。人類生存の宿命とは言え実に悲しい限りである。

敗戦国の惨めさ、我々は武装解除され、遂にあの恐るべき魔の国「ソビエト」に連行されて「シベリア」にて労役に服すること一年七か月。戦友の一人、広島出身の児玉君は自殺した。心よりご冥福を祈る。

終戦一か月後いろいろ情報が乱れ飛ぶうち、列車は先へ先へと走り続け、内地へ帰還の一抹の望みも夢と消え、捕虜として作業につくんだと諦めに変わる。酷暑零下三十五度から四十度にも下がるシベリアで、強制労働に服さねばならないのだ。寒さと食糧不足、しかし「ダワイダグボート（仕事をしろ）」のノルマ責めに、敗戦の惨めさを日夜感じる。幾度か美しい星空の下で、祖国を、父母を、友を想い泣いたことか。

シベリアの凍てつく大地もいくらかゆるみはじめ、長

かった冬も終りを告げようとする四月下旬、我々にとっでは一番の朗報である帰国命令が発表された。小生もその名簿に載ることが出来たのだ。その時の心中、筆舌に尽くしがたい。魔の国より脱出だ。今日のためにあらゆる労苦に耐えて来たのだ。

そして最終集結地「ナホトカ」に着いたのは七月三十日。それから乗船日の九月十二日まで、共産主義教育を強制された。日本人オルグによる教育「天皇制資本主義」国家からスタートし、我々の歩んだ天皇制軍隊の悪逆について、歴史上から説明し、これからの日本の進路は、マルクス共産主義あるのみと語る。

各ラーゲルを通過し、その後で乗船となる。ここでは、この教育に反したものは民主化していないということ、他の作業隊に列車で送り返されるのだ。朝起きて夜寝るまで帰国者集結地ラーゲルは赤旗のインターナショナルの歌で埋まる。最終ラーゲルを無事通過し六月十二日永緑丸に乗船、昭和二十二年六月十七日、無事我が家に帰省した。すべて裏切られたのか、との錯覚と、また帰ってこれた有り難さが交錯して、自分の存在が自分でも判

らない。やはりシベリアボケか？

身も心も疲れているのだ。その後一か月して耳鳴りがし、その後の一か月は仕事も手に付かず休養し体重は、七一キと約三割ほど太った。

復員後三か月後に誌した感想記をもとに書きました。

## 王道楽土であった「はず」の満州

山形県 大場 国治

満州は昔、日露戦争当時からのごく呼びなれた土地でした。ことに私どもが幼少のころの昭和六年七月にいわゆる満州事変が勃発して以来、一段と身近なものとなりました。

戦火も一応おさまり、昭和八年十二月二十三日には皇太子殿下（現天皇）の御誕生で日本国中が沸き上がりました。翌九年は東北地方の大凶作で冷害が特にひどく、私ども農家には一大悲劇が起りました。とても忘却はできません。私は小学校六年生でしたが衣食住において

は最低の生活でした。千秋の思いで待っていた一晚泊まりの遠足は中止になり、最大の楽しみにしていた、海を見るのができませんでした。貧農で小作農の分際だが、親は教育の念厚く高等小学校に進学させて下されました。俺たちはなあ、いくら難儀をしてもよいから、お前たち兄弟二人だけは立派になってお国のために尽くすのだぞと言う、あの親の言葉が今なお脳裏に残ります。

昭和十年三月二十三日、晴れて卒業して青年学校に進学しました。あのころから日本政府も目をつけたのが満州でした。国防と食糧増産が最大目的で、いわゆる国策だと称して、移民熱が沸き上がりました。

楽土沃野、新天地は招く、という宣伝でいやがうえにも若い我々の血を沸かせたものです。次男坊の私も村の同志六、七人とともに満州開拓少年隊（のちに、だれいうとなく「昭和の白虎隊」ともいわれました）に応募しました。

そして昭和十二年九月一日に我が家を出発しました。

皇居前の広場で弥栄を三唱し、大谷尊山拓務大臣私邸でお言葉を頂き、敦賀の港から秋雨けぶる日本海を一路、